

七夕空襲

毎年夏になると、私たちは平和のことに心がむかいます。ヒロシマ・ナガサキの被爆の日や、太平洋戦争敗戦の日を迎えるからです。夏休みのしおりにも、心がけて平和の問題を取り上げるようにしています。今年もそうします。

1945年7月7日、千葉市はアメリカ軍の爆撃で壊滅し、全面焼け野が原になりました。「七夕空襲」として歴史に残る出来事です。この夜、多くの人命も奪われました。あと1ヶ月と1週間経っていれば戦争が終わっていたのです。肉親・知人を亡くされた多くの方々にとっては、今でも忘れることのできない出来事です。そのうちのお一人に、西千葉教会会員の方でMさんという女性がおられます。先日NHKFMで、Mさんがご自身の七夕空襲の体験を語りました。（ご本人に承諾を得ずに）その内容をご紹介します。

Mさんは当時千葉高等女学校の学生でした。空襲のあった夜、父上は兵隊として戦地におられ、お兄様はお留守で、家にいたのは母上とMさんと弟さんの3名でした。空襲警報で家を飛び出し、防空壕に入りました。しかし防空壕が危険になり、そこを出て避難場所に指定されている広場に行きました。そこにアメリカ軍機が飛来して、まず照明弾が投下されました。一瞬「きれい！」とさえ思うほどに、真昼のような明るさが広場を照らしだし、続いて焼夷弾が降り注いできました。母上とMさんと弟さんは地面に伏しているしかありませんでした。逃げ惑う人たちもいましたが、その人たちはアメリカ軍機からの機銃掃射の標的になり、次々と倒れていきました。飛行機が去ったとき、弟さんは機銃弾に打ち抜かれて亡くなっていました。母上とMさんは足に被弾して動けなくなっていました。Mさんの上に母上が乗り、親亀小亀のような状態でお二人は這いました。近くの人々に助けられて、お二人は千葉大附属病院に運ばれ命を取り留めましたが、母上は片足を手術により失われました。

これがMさんの七夕空襲体験です。母上はその後80歳まで生きられましたが、時折襲ってくる足の激しい痛みに苦しみ続けたそうです。さらに戦地に行っていた父上は戻ってお見えになりませんでした。Mさんは「あの夜の体験は一生忘れられません。戦争はそのとき人を苦しめるだけでなく、その後の一生に耐えがたい痛みを残すものです。戦争は絶対いやです。」と語って、このお話をしめくられました。

Mさんのこの体験を私たちも大切にしたいと思います。実は筆者もMさんの七夕空襲体験とほんのチョッピリかかわっています。私の母はMさんが行っていた千葉高等女学校で教師をしていました。赤ん坊のころの私は、お手伝いの人に抱かれて母の勤め先に行き、母から授乳をしてもらっていました。女学生はそんな私を良く知っていたようです。だから七夕空襲で生き残った女学生は「あの赤ちゃんも焼け死んだに違いない」と言い合っていたのだそうです。（筆者は田舎に疎開していて無事でした。）

世界から戦争が絶えたことはありません。戦争に向かっていく力がどんなに大きく巧妙であるか、私たちは歴史からそれを学んでいます。戦争は絶対いやだと誰もが言いますが、いつの間にか戦争に巻き込まれます。戦争に突き進んでいく力の大きさに抗するのは命がけです。自分の考えをちゃんと持つ市民であること、それを言える自由が保たれている社会であることが大切です。戦争に向かっていくときには、国中が「本気で」盛り上がってしまいます。「いやいや」ではないのです。教育がこの巧妙さのツールに使われます。教育で国民の目をくらませ、心を麻痺させるのです。このために教育はいつでも国家権力から狙われています。教育に携わるものはこのことを肝に銘じておかねばなりません。そして教育の自由と健全さを守るためにも、市民であるご家庭の助けが必要です。